

ヒマラヤ

No.311



1997 OCTOBER



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN——HAJ

HAJ 30周年記念行事資金協力をお願い

HAJは、1967年10月に創立され、緒先輩達の努力により本年、30周年を迎えることになりました。これを機会に記念の幾つかの行事を行うこととなりました。概要は下記のとおりであります。執行部としましては、これらの行事にかかる費用につきまして、極力外部資金の導入などを計って賄う予定であります。会員の皆様にも資金のご協力を仰ぎたくここにお願い申し上げます。

記

1. お願いする金額：一口 1万円
*機関誌「ヒマラヤ」誌上にて氏名・口数を公表します。(匿名を希望される方は、その旨ご連絡下さい。)
2. 記念行事の概要：
 - 1) 式典関係：
式典：1998年1月25日(日)(300名程度を予定)
午前：日本人ヒマラヤニストによるパネ

ルデスカッション

午後：ネパール、インド、パキスタン、中国から登山関係者を招請し、それぞれの国の登山環境の現状と問題点について講演をお願いする。

夜間：記念祝賀会

- 2) 出版関係：
 1. HAJ 30年間の行動記録： 500部
 2. ヒマラヤ日本隊のまとめ： 500部
 3. ヒマラヤ日本隊遭難事故事例集：1000部
 4. 機関誌「ヒマラヤ」総索引： 200部
- 3) 野外関係：
それぞれのヒマラヤ諸国で行われる行事にあわせて臨時派遣。
- 4) 写真展：
会員からヒマラヤの「この一枚」を募集し、展示する。

表紙写真

クーラ・カンリⅡ峰の登頂を断念した我々は、ベース・キャンプで1週間ほど過ごす事になった。ある日、カメラだけを持って北側の山の斜面を登った。高度を上げるにつれて東の空の雲も消え、手前の尾根に隠されてBCからは一部しか見えなかったクーラ・リ(打拉日 6,777m)の山塊が全貌を現わした。
(記：太田 康夫)

ヒマラヤ No.311

- | | |
|------------------------------------|-------|
| 1. ヒマラヤ蝶紀行 | 菱川 法之 |
| 6. 遥かなる深遠の地 稲 城 | |
| 9. ネパール・ヒマラヤの新地図のこと | |
| 13. トレッキング許可峰入山状況一覧 | |
| 14. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス・ヒマラヤから〉 | |
| 19. 中国高峰登山小史(15) 西藏その1 | |
| 24. 寸感・事務局日誌 | |

ヒマラヤ蝶紀行

菱川 法之

■ 7月19日～20日 序章（出撃前夜）

心の中では、いつかその日がきっと来るだろうと、漠然とではあるが確信めいたものがあつた。その日の為という訳ではなかったのだろうが、かれこれ10年ほど前から初夏の大雪山詣でを続けてきた。狙いはウスバキのみ。ウスバキチョウをいかにシャープにフィルムにとらえるか。そのためには、パルナシウスの習性、飛翔時および非飛翔時の子細な行動は元より天候の好み、植生の好み等、自分がパルになったつもりで研究した。

カメラもニコンから軽いオリンパスに換え、シリーズ使いの技も磨いた。そして、なんとか思うように撮れるようになって来ていた。

いつか或る日きっと来るだろうと、蝶が大好きで、山が好きな者であれば必ず憧れ、そこへ行かなければ一生悔いが残るであろう彼の地（ヒマラヤ）へ旅立つ日が。

ヒマラヤそれは何と魅惑的な響きを持った言葉なのか。世界の中心といった感じ。事実、世界中のパルナシウスの故郷はヒマラヤである。また、ヒマラヤは仏教徒達にとっても聖地であり、一生に一度は訪れたい釈尊出生の地である。世界中のヒッピーが集まったのも、何となく分かるような気がする。

ヒマラヤそれは又何と呪術的な言葉であろう。昔から仏教徒も巡礼に出るためには、何年も前から身辺の整理をし、一家離散も辞さない覚悟でヒマラヤ巡礼に臨むとも言われる。交通の発達した今日でもヒマラヤは未だに秘境で、遠征のためには長期休暇が必要で、それでも敢えて実行すれば職席を奪われ兼ねない。しかも高山での過酷な状況と不衛生な環境にどこまで耐えられるかという懸念がいつも付きまとう。

しかし、そんな或る日は、突然にやって来た。

昭和43年春の西表島縦断の時に出会って以来、二十数年間ごぶさたしていた目黒の宮下哲夫氏からお誘いの手紙が舞い込んだのである。しかも医院開業準備に追われている超多忙の時期に。

そして、運命の選択。できるだけ内密に事を運んだが、身内からは人生もっと真面目に生きると諭され、友人からは、開業と同時に必ずつぶれると脅かされ、人間失格の烙印をしっかりと押されての旅立ちであった。

閑話休題、ヒマラヤ山脈は中国、ブータン、ネパール、インド、パキスタンにまたがる東西およそ2,500km、幅250kmの大褶曲山脈であり、ヒマラヤとは古代サンスクリット語で、ヒムが雪、アラヤが蔵するの意味（ちなみに仏教で言うアラヤ識とは蔵識と訳す）。すなわち雪を蔵する（特性として持つ）山という意味である。

ヒマラヤは一般に八つの地域に大別される。ナムチャ・バルワを主峰とするアッサム・ヒマラヤ。クーラ・カンリを盟主とするブータン・ヒマラヤ。カンチェンジュンガを頂くシッキム・ヒマラヤ。最高峰エヴェレスト（中国名チョモランマ、ネパール名サガルマータ）を初め8,000m峰を八座も数えるネパール・ヒマラヤ。ナンダ・デヴィを擁するガルワール・ヒマラヤ。パキスタン領のナンガ・パルバットが聳えるパンジャブ・ヒマラヤ。高峰K2が従えるカラコルム。アフガン、パキスタン国境ティリチ・ミールを主座とするヒンズークシュの各山群である。

六月から八月にかけての南西モンスーンは、インド洋上の湿った大気をたっぷり含んで北上し、ヒマラヤ山脈にぶつかって多量の降雪をもたらし、ヒマラヤ南麓や、インド平原に豪雨を降らせる。

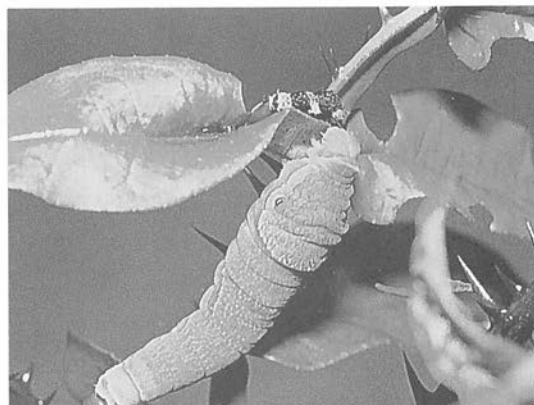
反対に北側のチベット高原では乾燥した草原や砂漠が広がっている。

われわれの行こうとしている道は、インド平原を北上し、ヒマラヤ南麓に取っ付き、旧英軍の避暑地マナリを経て、高山植物の豊富なロータン峠(3,955m)を越え、一路北をめざす。一山越える毎に乾燥がはげしくなり、バララチャ峠(4,900m)からラチュン峠(5,065m)を越えると見渡す限りの岩砂漠となって行く。そして5,200mのタガラ峠を越え、ラダックの街レーに続く道である。

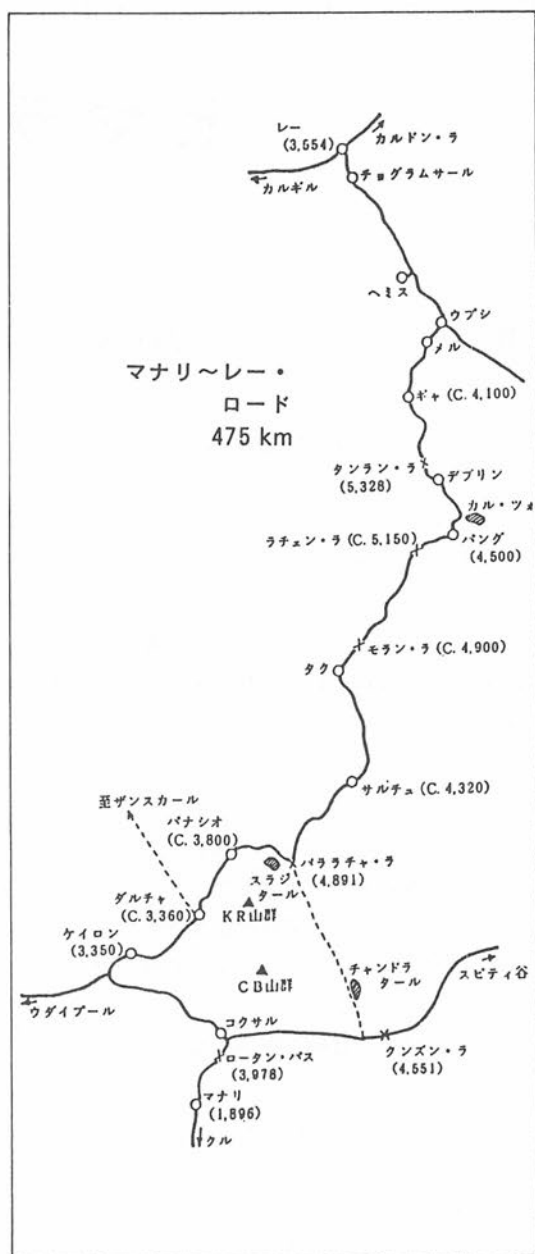
■ 7月21日 避暑地マナリ

ロータン峠への道が昨夜来の雨による土砂崩れで復旧に時間がかかるとの情報が入り、Zarim-Resortホテルの裏山(3,000m位)に高度順化をかねて登った。沢ぞいに糞尿の跡がなければスイス・アルプスと見間違えるほど風光明媚な所で、ヒマラヤ・シーダーの巨木の森で雷に撃たれた古木が印象的だった。

マナリ近郊では、帰途に *Papilio Polycitor* (クジャクアゲハ) の幼虫を含めた全ステージが見られた。ここでは、*Aulocera swaha* (ハチノジヒカゲ) や *Heliophorus sena* (インドウラフチベニシジミ) など山地と平地産の各種が幅広く見られ、*Aglais ladakensis* (カシミールコヒオドシ)、*Chilodactylus childreni* (オオヤマミドリヒョウモン)、*Achyma opalina* (ヒマラヤミスジ)、巨大なルリシジミ *Celastrina huegeli* など山麓に見られ、*Colias fieldi* (フィールドモンキチョウ)



▲クジャクアゲハの幼虫



ウ) や原名亜種のヤマキチョウ *Gonepteryx rhamnii* 等が、民家の庭先や林檎畑を飛び回っている。

■ 7月22日～23日

ロータン峠～バララチャ峠

Rohtang峠(3,950m)は、プレートテクトニクス理論によれば、アフリカの近くにあったインド亜大陸が海を越え、4,000万年以前にユーラシア大陸にぶつかった最前線に位置し、インド洋か

らインド平原をへてインダス河畔から吹き上がる熱帯の湿った風がヒマラヤ山脈にあたり、その南麓に雨をもたらし、高山植物が豊富である。

Rohtang峠の付近では *Pyrgus alpina* (アルプスチャマダラセセリ) や *Issoria lathonia* (スペインヒョウモン) が飛び出し、*Aulocera brahmia* (ハチノジヒカゲ) が雲間に舞っている。

標高も3,500mを越えると残雪が多くなり、岩壁に咲くヒマラヤの青いケシ (*Meconopsis aculeata*) が霧に揺れるなかを、*Parnassius hardwicki* (ハードウィックウスバシロチョウ) は、厚い雲の切れ間の僅かな陽射しを待って、すばやく飛び回っている。

滴るはヒマラヤ南麓雪解水

ハードウィッキー高根の蝶とぶ

峠を越えてKhoksarの村に近づくと、霧はすっかり晴れ、沢すじのスイバには *Lycaena kashyapa* (ウラミドリベニシジミ) が占有行動をとっており、窪地の日溜りには *Polyommatus stoliczkana* (ストリカーナ・ルリシジミ) の真っ青に輝く雄と、色とりどりの雌が葉上に光っている。急斜面の岩場には *Paralasa mani* (マニベニヒカゲ) 等や *Boloria pales* (ヒマラヤヒメヒョウモン) が飛び交い、蝶の数も比較的多い。ただこの国では、植生が豊かな場所では必ず広範囲で放牧がされており、毎年の蝶の発生数にかなりのばらつきが見られると言うのも、こうした思わぬところに規定要因が在るのかも知れない。

■ 7月24日～26日 憧れのタガラ峠



▲バララチャ峠 (4,900m)

▼ハードウィック ウスバ



高度計は5,100mを指している。曇まじりの冷たい乾いた風にうたれて、かれこれ一時間近くじっと待っている。南西モンスーン季の真っ只中、それでも時々厚い雲の切れ間から晴れ間がきざし、青空が広がってゆく。高山の日差しは異常なほど強く、ガレ場の岩に反射する太陽光線で眼が痛い。

ふと目を凝らすとガレ場の岩の表面すれすれに、ジグザグに飛んで来る蠅のようなすす黒い物体が眼に入る。止まった場所にそっと近づくと、足もとに気をとられて目をちょっと離れたすきに見失ってしまった。すると今度は狼狽して近づいた足元から、カサッと乾いた音を耳に残して何かが飛び去った。これが、*Parnassius acco* (アッコ・ウスバシロチョウ) との初めての出会いであった。

速い！ウスバキチョウよりずっと速い。こんなことで写真なんか撮れるんだろうか？、しばし呆然として飛び立った場所にしゃがみこんでいると、すぐ目の前の岩の隙間に *Corydalis* 属の植物がひっそりと芽吹いていた。

これはまさに天からの啓示であった。アッコは追うな、待てと。まず *Corydalis* を見つけ、晴れるのを待てと。天空のかなたまで延々と続く岩砂漠にあって、それでもガレ場の岩の隙間には、峠を囲む山々の雪線からしみ出した水の恵みを得て高山植物が生息していた。

昨日もしやと、単独で登ったマハラジャ・ウスバシロチョウの棲む6,000m級の峠を囲む山の上は、やはり今年は真っ白な雪に覆われ、天使は雲の下で眠っていた。

さて今度の晴れ間は飛んで来ても身動き一つせずじっとしていると、カサッと乾いた音をたて、

近くの岩に止まった。羽を全開して日光浴をしている。数分して飛び立ち、また近くの3mほど手前の岩に止まり、なんと岩の隙間にもぐり込んでしまった。

各種パルナシウスごとに好む岩の大きさが違うと言うが、それは、パルの習性もさる事ながら、その環境を好む植物の種類に規定されるのでは無からうか。

アッコ翔ぶ夏ヒマラヤの峰に立つ 見果てぬ夢ぞ今かなうべき

こうした眼で岩の隙間を探すと、岩砂漠にも高山植物がそこそこに生えていた。ただ *Corydalis* 属のなかでもキケマンは切り立った崖の一か所に僅かに残っていた。

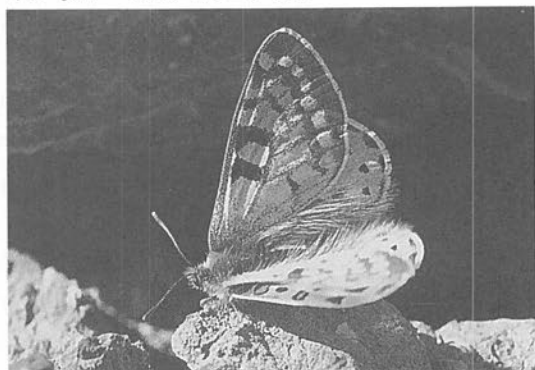
今朝Lehの街から登ってくる途中、Upsiのチェックポイントを過ぎて30分ほどの部落の沢ぞいにキケマンの比較的大きな群落が数か所在り、*Parnassius charltonius* (カルトニウス・ウスバシロチョウ) の発生源は中国のインペラートル・ウスバシロチョウのように、かなり低い山麓なのかもしれない。

タガラン峠のカルトニウスは *P.charltonius* o-



▲タガラン峠 (5,200m)

▼アッコ・ウスバシロチョウ



tto という亜種で希種である。ラダックでは水の無いところに草は無く、ほとんどが砂漠。家畜の食害を免れるのは鋭い棘を持つものか、有毒な植物のみである。

タガランの眩しき光、岩と雪 あざみに透けるヒヤリンの羽

鋭い棘を持つ黄色い花のマメ科の灌木は遠くからは、柔らかな絨毯のように見え、近づいて知らずに座ると偉い目に遭う。*Colias ladakensis* (ラダック・モンキチョウ) はこの植物に強い執着をもっていて、周囲を非常に速いスピードで飛んでゆくが、知らない間にまた戻っていたりする。

標高も5,000mを越えると大気も稀薄になり、少し走るだけで頭の中が真っ白になる。高山病の恐怖を肌で感じながら、それでも蝶が来ると登ってしまう。麓のLehの街の診療所では、高山病でたおれた仲間が酸素マスクと不潔な点滴で生死の間を彷徨っている。

ラダックの砂漠の谷に茜さし 白道渡る金色の蝶

Lehの街にもどると、低地療法で少し意識を回復した仲間を空路デリーに急送し、残った者達は航空券が取れないので (Lehの街は10年に一度のラマ教寺院の大祭があり、半年以上も前から予約でいっぱい)、再び地獄の陸路を辿る事になる。

■7月27日 めかるみのタガラン越え

早朝Lehの街を出発し、街外れのラマ教寺院に別れを告げ、一路南に進路をとる。再び5,000m

級の峠を幾つか越え無ければならない。

帰りにもタガラン峠に寄り、タガランでは少ないといわれる *Parnassius stoliczkanus* (ストリカーナ・ウスバシロチョウ) や *P. acdestis* (アクデスティス・ウスバシロチョウ)、今年は少ないが例年は比較的多産するという *P. epaphus* (エパプス・ウスバシロチョウ) 等のバルナシウスをみとめた。ここでは *C. stoliczkana* (ストリカーナ・モンキチョウ)、*C. transibulus* (トランシブルス・モンキチョウ) 等のコリアスも確認した。特筆すべきは仲間の新部氏により *Oeneis buddaha* (ブッダ・タカネヒカゲ) が初記録された事である。

しかし、地獄の陸路とはよく言ったもので、タガラン越え悪路のぬかるみでの悪戦苦闘で時間をとられ、この夜は、パン(地名)の軍用キャンプのチェックポイントで引っ掛かり、野宿同然の車中泊となった。標高4,800m 室内気温 4℃。“顕示難行陸路苦”“信楽易行水道楽”という正信偈のくだりが想い出されてしかたがなかった。

■ 7月28日 光輝くらチュン峠

翌朝はピーカンの晴天なり。しかし体調は最悪。未明から悪寒戦慄がはしり、関節痛で腕が挙がらない。最初は、寒さと寝違いのせいだと思っていた。ところが、昼だと言うのにまだ寒く、リュックがうまく担げない。崖も登れない。ここで初めてウィルスカリケッチャに感染している事に気付いた。ツツガ虫の刺し跡を調べたが、よく判らない。とりあえずテトラサイクリンを内服したが、ガレ場をわたる仲間のシルエットが、まるで映画



▲ストリクッカ・ウスバ

▼カルトニウス・ウスバシロチョウ



の中のように写る。きっと熱が出ているんだろう。涸沢の花と戯れている目の前に *Parnassius stoliczkanus* (ストリカーナ・ウスバシロチョウ) がとまった。写真が撮れない!

その後、レンズの焦点を花に固定して勝手に止まったのが *Pontia callidice* (クサツキシロチョウ) である。

こうしてヒマラヤ交響曲は主旋律が突然にとぎれた形で終章をむかえる事になる。

■ 7月29～8月5日 終章

岩砂漠のレーから緑滴のマナリまで、途中に氷河を抱く素晴らしい山々を堪能するはずの旅は、往復陸路という最悪のシナリオで強行された。しかもデリーまでも陸路というおまけ付きで。しかし喉元すぎれば暑さ忘れるとかで、いつの日かまた来る事になるだろう。

薬が効いたのか熱発と関節痛は2日後に軽快し、緑のロータン峠と峠の向こう側のコクサルや、麓のマナリとクジャクアゲハの多いレイソンの散策を楽しめたのは何よりであった。

稿を終えるにあたり、旅行中いつも適切な判断を頂戴した片山俊彦兄、戦友とも言うべき同行の新部公亮氏、鶴巻照夫氏、尾熊勇氏、勅使典夫氏、稲垣周市氏、宮本竜夫氏、和田信氏、大野康邦氏、そして最後になりましたが、運命の選択を迫るような素晴らしい機会を与えてくれた旧友、宮下哲夫氏に感謝いたします。

(編注) 本稿は、「Butterflies」第16号(日本蝶類学会発行)に掲載されたものを一部修正したものである。

遙かなる深遠の地

稲 城

DAO CHENG

クーラ・カンリⅡの登山を終えて帰国の途上、四川省成都で一冊の写真集と出逢った。オールカラーのその書名は「稲城—在那遙遠的地方」となっており、表紙を飾っているのは、恋いこがれて1989年夏に遂に実現した「シャラ・リ」の美しい姿であった。

シャラ・リの美しさは、この登山隊に参加した誰もが知っている。しかし、この本の中には、夏に行った我々が見ることのできなかった「錦秋」の稲城の姿が写し出されていた。それは、驚くほどに美しくも静かなる世界であった。

夏、ニンチン・カンサ隊に同行してラサに行き、帰路の機上から正にこの本に紹介されている「稲城の古い帽子」を見た。雲の間に間に繰り広げられる氷帽と湖沼。その姿を写すにもフィルムが切れていた。

何と云う不運。同書から「知られざる稲城」を紹介する。

(記：山森 欣一)

稲城県は、中国の四川省の南西の縁に位置し、青蔵(青海、チベット)高原の南東部にあり、横断山脈の東側にあります。カンパチベット区の甘孜チベット自治州に属しています。

北緯27° 30′ -29° 30′、東経99° 56′ -100° 36′ にまたがっています。南北の長さは174km、東西の幅は63km、面積は7323km²です。人口は3万人で、チベット族を主体としています。経済は半農半牧。

稲城の地理と地貌には独特のがあります。北は高く南は低い、西が高く東が低い。重畳とした山脈が連なり、その麓には青々とした草木が生え茂り、山脈と山脈の間を川が貫いています。高い山もあれば低い山もあり、奥深くひっそりと佇む山もあります。また、広々とした草原の中を、さらさらと流れる川もあって、景色は千変万化して、訪れる人々を陶醉させます。

北部は高原の広い谷となっており、海子山は、稲城川の河畔3,600mから5,000mに達しています。この山は、青蔵高原のもっとも大きい古い氷河の遺跡で、昔から「稲城の古い帽子」と云われています。その氷蝕地形のできる過程が完全で、氷蝕岩盆が、空の星・盤上の碁石のように一面に分布していて、3,200km²の内に大小の湖沼が1,145個あって、その規模と数は、中国有数のものであり

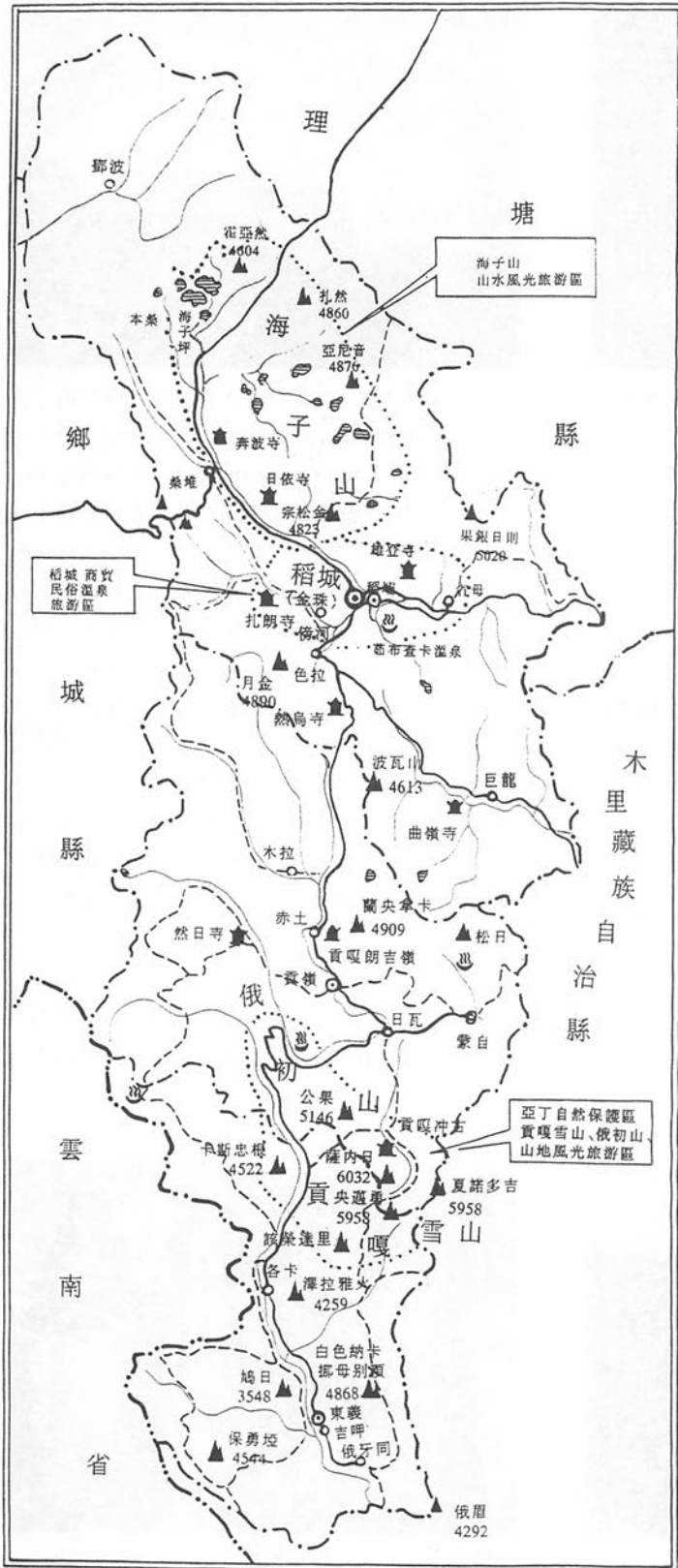
ます。

中部は山と平原の区域で、波瓦山と赤土川があります。赤土川は澄きっていて魚が群れています。河畔の牧場は広々とし、溪流は交錯し、森林は見渡す限り果てしがありません。波瓦山は形勢が雄大で秀麗であり、四季がはっきりとしています。冬は雪が一面に真っ白に降り積もります。春と夏は、つつじがいたる所に咲き乱れていて、芳ばしい香りと艶を競っています。秋になると紅葉が火のごとく、幾重にも重なり林を染め、その有り様は妖艶ですらあります。

南部は高山と峡谷の世界です。俄初山が東義川沿いにあります。俄初山は5,140m、高く切り立っており山姿は雄大です。俄初山が人々を最も酔わ



▼稻城县旅行概念図



此圖不作界綫劃定使用

▼南稻城的珍貴瑪尼塚



▲稻城特產的松茸

▼別天地、コンカチュンゲー



せるのは秋の景色です。赤や黄色の鮮やかさに緑が織り成す様は最高です。東義川は一頭の良馬のごとく、俄初山から飛ぶように一気に駆け下り、兩岸には古木が高く聳え立ち、瀑布が幾つもあり、涛音が唸りを上げています。

俄初山と隣合っているのは、チベット地域で、名声を馳せる「雪域の神韻」、つまり稻城の神峰です。それは三つの雪峰から成っていて、峰の名が、第五世ダライ・ラマによって名付けられたと伝えられています。北の峰はシャラ・リ（先熱日）で「観音菩薩」という意味で6,032mです。南の峰はヤンメイヨンで「文殊菩薩」5,958mです。東の峰はシャノドジで「金剛手菩薩」5,958mです。三山は約800km²の広さの中にあります。稻城の神峰は冰雪に覆われ雄大で壮麗です。チベット人はこの三山を神山として参拝しています。山腹の五色海は七色に輝き光線によって変化します。

稻城は悠久の歴史文化を持っています。全県の



▲北部の草原

▼シャラ・リ（6,032m）



13の寺院の中では、雄登寺と貢嘎嶺寺は有名です。貢嘎嶺寺の建物は広大で、現存する第五世ダライ・ラマに贈られた一体の彌勒銅像は貴重な物です。雄登寺は明代の始め頃に建てられたもので、十万冊の経書を持っており、数百体もの大小の仏像を備えています。その中には第九世の班禅（ハンセン）が白檀で造った釈迦牟尼像があります。県内に住むチベット族は、長い間に言語・服装・風俗の違いが出ていますが、共存しています。

稻城は、四川省の西中国の奥深く、知られざる地です。しかし、素晴らしい自然景観、古風な民族、神秘的な原始人などは、時間と空間の垣根を突き破って今、全世界の人々の前に姿を現しました。

（編注）

シャラ・リの登山記録は、ヒマラヤ210号に計画、216号に報告がある。又、「もう一つのチベット桃源境への山旅」が、1990年3月発刊されている。



▲南部のチベット族の娘達

ネパール・ヒマラヤの新地図のこと

昨年ネパールで新しい地図が発行された。縮尺は5万分の一。入手できた中央部のうち、登山許可峰となっている山々について山名と高度の対比表を整理してみた。

マカルーが22m高くなったり、逆にチョー・オユーが13m低くなっている。また、ゴジュンバ・カンが173m高くなり、ギャチュン・カンが91m低くなっている。

ひどいのはガネッシュ・ヒマールで、Ⅰ峰については「ヤンラ」となったが、今までラブサン・カルボと呼ばれていたⅡ峰の位置にサラスンゴが来て（Ⅲ峰）となった。かつてⅢ峰と呼ばれていた位置には、ガネッシュⅡ峰が来ている。Ⅱ～Ⅳについては高度順でもなさそうである。Ⅴ峰にいたっては、216mも低くなってしまった。

登山者としては、ネパール政府が改定山名や高度を発表しない限りは、現行のものを使用しなければならないのは従前どおりである。地図の11ページはチョー・オユー、12ページはガネッシュである。（山森）

現行と新地図対比一覧表

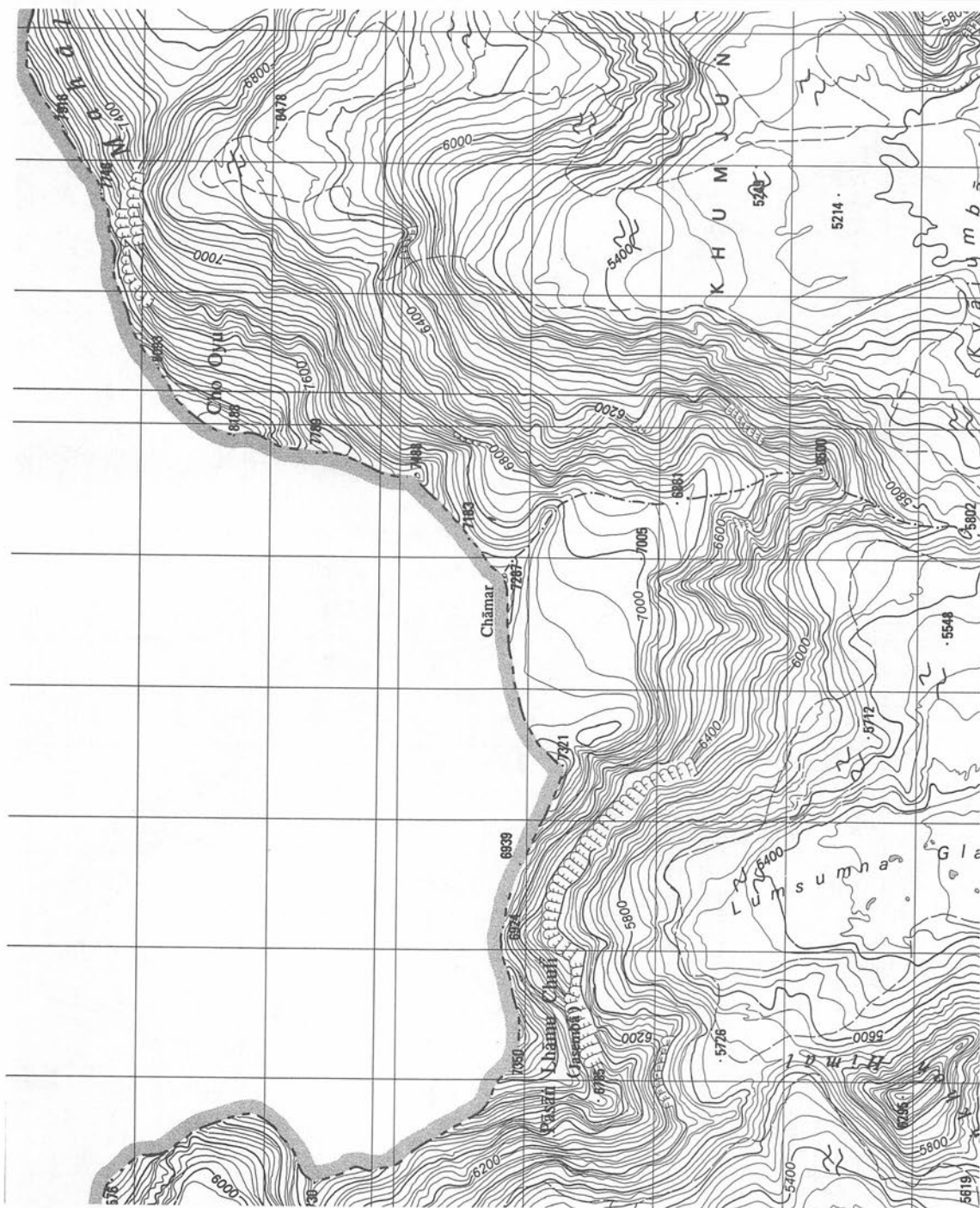
No.	山 名		高 度		差	地 域	備 考
	現 在	新 地 図	現在	新図			※英文は新地図に()書かれている山名
(A. ネパール隊または3人以上のネパール人との合同隊に限る)							
2	Bhemdang Ri	Bhemdan Ri	6150	6150	0	ランタン	Morimoto
3	Leonpo Gang	Dorle Pahad	6979	6979	0	ジュガール	Lonpogan
6	Dorje Lakpa	同左	6966	6966	0	ジュガール	
7	Ganchenpo	無名峰	6387	6378	-9	ジュガール	
10	Gurkarmo Ri	同左	6891	6889	-2	ジュガール	
11	Gyachung Kang	Gyachun Khan	7952	7861	-91	クーンブ	
12	Gyalzen Peak	Gyalsten	6151	6151	0	ジュガール	
14	Karyolung	無名峰	6511	6530	+19	ロールワリーン	
15	Langtang Ri	Lantan Ri	7205	7205	0	ランタン	
16	Bhairab Takura	Bhairav Takura	6799	6799	0	ジュガール	
19	Ohmi Kangri	Omikan Ri	6829	6839	+10	ジャナク	
20	Phurbi Chuli	Phurbochyachu	6631	6637	+6	ジュガール	
22	Urkinmang	無名峰	6151	6143	-8	ジュガール	
(B. 上記同様の隊に限るが、登頂された後〔ネパール人を含む〕Cに変わる)							
2	Ganesh I	Yangra	7429	7422	-7	ガネッシュ	Ganesh I
(C. 一般の外国隊に開放されているピーク)							
1	Ama Dabulam	Ama Dablam	6812	6814	+2	バルン	
8	Baruntse	同左	7129	7152	+23	バルン	
10	Chamlang	Chamlan	7319	7321	+2	マハラングルー	

No.	山 名		高 度		差	地 域	備 考
	現 在	新 地 図	現在	新図			※英文は新地図に()書かれている山名
12	Chobuje	無名峰	6685	6686	+1	ロルワリー	
13	Cholatse	同左	6440	6335	-5	クーンブ	
14	Cho Oyu	同左	8201	8188	-13	クーンブ	
15	Cho Polu	同左	6711	6700	-1	マハラングルー	
24	Sagarmatha	同左	8848	8848	0	クーンブ	
26	Ganesh II (Lapsan Karpo)	Salasungo (Gonesh III)	7052	7043	-9	ガネッシュ	
27	Ganesh III (Salsango)	Ganesh II	7111	7118	+7	ガネッシュ	
28	Ganesh IV (Pabil)	Pabil (Ganesh IV)	7110	7104	-6	ガネッシュ	
29	Ganesh V	同左	6986	6770	-216	ガネッシュ	
32	Gauri Sanker	Gauri Shankar	7134	7135	+1	ロルワリー	
49	Kangtega	Khantega	6779	6783	+4	バルン	
52	Khatang	無名峰	6782	6790	+8	ロルワリー	
54	Langsisa Ri	無名峰	6427	6412	-15	ジュガール	
55	Langtang Lirung	Lantan Lirung	7234	7227	-7	ランタン	
56	Lhotse	同左	8516	8516	0	クーンブ	
57	Lhotse Shar	同左	8400	8382	-8	クーンブ	
58	Lobuje West	Nirekha Peak	6145	6159	+14	クーンブ	
59	Makalu I	Makalu	8463	8485	+22	マハラングルー	
60	Makalu II	Kansun Tse	7678	7678	0	マハラングルー	
65	Ngojumbakang	無名峰	7743	7916	+173	クーンブ	II 峰である7,743mにNo Jumba Kan
69	Number	Numbur	6957	6958	+1	ロルワリー	
70	Nuptese	Nuptse	7855	7864	+9	クーンブ	
73	Pumo Ri	Pumori	7161	7138	-23	クーンブ	
76	Shanti Shikhar	Shar Tse	7591	7591	0	マハラングルー	
77	Shartse	Shar Tse II	7459	7457	-2	マハラングルー	
80	Taweche	Tobuche Peak	6501	6495	-6	クーンブ	
81	Tamserku	同左	6623	6618	-5	クーンブ	
93	Drangnag Ri	無名峰	6801	6757	-44	ロルワリー	
98	Pasang Lhamu Chuli	Pasan Lhamu Chuli	7351	7350	-1	クーンブ	Jasemba

(D. ネパール登山協会の扱うトレッキング許可ピーク)

1	Imja Tse	Imjatse	6160	6165	+5	クーンブ	
2	Palder Peak	Bhrango	5896	5860	-6	ガネッシュ	Paldor
5	Ramdung	無名峰	5925	5840	-85	ロルワリー	高度の記載なく等高線からの推定値
6	Parchamuche	Parchemuche	6187	6279	+92	ロルワリー	
7	Mera Peak	Mera	6473	6648	+175	クーンブ	
8	Kusum Kangguru	Kusumkhan Karda	6367	6370	+3	クーンブ	

No.	山 名		高 度		差	地 域	備 考
	現 在	新 地 図	現在	新図			
9	Lobuje East	Lobuche	6119	6135	+16	クーンブ	※英文は新地図に()書かれている山名 高度の記載なく等高線からの推定値
10	Kwangde	Tartikha	6011	6186	+175	ロールワリン	
15	Konga Tse	Nanjajun	5849	5793	-56	クーンブ	
16	Kangiya Chuli	無名峰	5844	5863	+19	ランタン	
17	Pokalde	同左	5806	5680	-126	クーンブ	



トレッキング許可峰入山状況一覧（1991～1996）

ネパール登山協会によれば、1991年から1996年までの過去五年間のトレッキング許可峰18座の入山状況は下記の表の通りである。イムジャ・ツェ（アイランド・ピーク）の人气が圧倒的に高く、許可数・登山者数共に全体の1／3以上を占めており、人気第二位のメラ・ピークと併せるとその大半を占めている。

山 名	1991～92		1992～93		1993～94		1994～95		1995～96		計	
	許可	人数	許可	人数	許可	人数	許可	人数	許可	人数	許可	人数
イムジャ・ツェ （アイランド・ピーク 6,160m）	146	810	193	997	176	896	171	991	213	1,050	899	4,744
メラ・ピーク（6,654m）	63	377	68	405	79	419	90	562	89	553	389	2,316
ラムドゥン（5,925m）	41	262	29	201	38	207	44	243	49	270	201	1,183
パルチャモ（6,187m）	33	185	28	120	49	302	45	234	45	243	200	1,084
ピサン・ピーク（6,091m）	22	124	25	126	30	162	26	159	37	149	140	720
ロブジェ E（6,119m）	30	177	18	59	28	105	36	207	29	151	141	699
ポカルデ・ピーク （5,806m）	11	78	15	95	9	55	16	114	24	166	75	508
ガンジャラ・チュリ （ナヤガンガ 5,844m）	20	83	29	138	24	97	37	169	22	126	132	613
タルプ・チュリ （テント・ピーク 5,663m）	24	140	19	78	21	79	20	107	21	86	105	490
チュルー東峰（6,584m）	14	57	14	71	11	78	9	40	2	17	50	263
シング・チュリ （フルード・ピーク 6,501m）	8	41	10	65	12	58	8	37	10	55	48	256
パルドール・ピーク （5,896m）	5	24	10	65	12	58	8	37	10	55	45	239
クワンデ（6,011m）	10	33	1	9	5	28	7	38	8	21	31	129
クスム・カンゲル （6,367m）	11	32	2	11	7	16	8	35	8	27	36	121
コンガ・ツェ （メヘラ・ピーク 5,849m）	4	15	7	37	3	19	3	12	6	14	23	97
ヒウンチュリ（6,441m）	3	9	2	7	6	28	4	16	4	28	19	88
チュルー西峰（6,419m）	9	41	4	18	6	20	9	40	2	17	30	136
マルディ・ヒマール （5,587m）	2	17	5	7	4	19	2	5	2	5	15	53
計	456	2,505	479	2,509	520	2,646	543	3,046	581	3,033	2,579	13,739

地域ニュース

《インド》

新大統領にナラヤナン氏就任

インドのヒンズー社会で、「不可触民」として最底辺に位置付けられてきた被差別カースト出身のコチュェリル・ラーマン・ナラヤナン氏（76歳）が、7月25日インドの新大統領に就任した。独立の父ガンジーが「ハリジャン（神の子）」と呼んだこの階級の出身者が政府の要職に着いた例はあるが、大統領は初めてである。

ナラヤナン氏の大統領就任は、差別に苦しむ底辺層の民衆の新たな希望の星となっている。

（トピックス参照）

洪水で135人が死亡か

ヒマチャル・プラデシュ州のシムラ地方一円で8月11日夜から12日にかけてモンスーン雨による洪水があり、約135人が濁流に流されたり、土砂崩れに遭って死亡した模様。（8.13朝日新聞）

列車爆発で7人死亡

インド北部のアッサム州ラキムプール地区で14日、旅客列車内に仕掛けられた強力な爆弾が破裂し、乗客7人が死亡、8人が負傷した。治安当局によると、爆弾は遠隔操作で爆発したものとみられ、インドの独立50周年記念日を目前にして、分離独立を主張する同州の過激派が仕組んだテロとみている。（8.15朝日新聞、東京新聞）

JAC東海支部隊チャルン峰初登頂

チャルン峰（6,546m）を目指していた日本山岳会東海支部隊（鈴木常夫総隊長以下10名）は、7月11日に同峰の初登頂に成功した。登頂したのは水野起巳（46）隊長と丸山剛（39）、中世古直子（59）、菊地啓一（49）三隊員と連絡官並びに高所ポーター三名。その後13日に環境調査隊の玉越弘志（50）隊長と今田英司（49）隊員が高所ポーター一名と共に登頂、15日には鈴木総隊長と田中

太門（64）、小島清子（63）、渡辺くみ（61）の三隊員と高所ポーター四名が登頂した。

労山隊ドラウパディ・カ・ダング初登頂

ドラウパディ・カ・ダング主峰（5,716m）を目指していた日本勤労者山岳連盟の高所登山学校隊（近藤和美隊長以下10名）は、8月3日、同峰の初登頂に成功した。登頂したのは近藤和美（55）隊長と池田壮彦（50）、友永芳和（48）、長岡平助（47）、山岸富佐夫（38）四隊員の計五名。また、Ⅱ峰（約5,670m）には8月4日、池田壮彦、長谷川勉（23）、大神田伊曾美（53）の三隊員が、5日には近藤隊長と伊東千朋子（40）、児玉浩子（37）両隊員が登頂した。

《パキスタン》

独立式典で警官発砲、22人死傷

カラチにあるジンナー廟前で8月14日夕、独立50周年の記念行事に集まった民衆に警官が発砲、少なくとも2人が死亡、約20人が負傷した。発砲が起きたのは、記念行事に出席したシャリフ首相が演説を終えて、同廟前から去った直後。同首相が演説中、「人々を近寄らせなさい」と警備当局に呼び掛けたため、押し寄せた民衆と警察とのみ合いが始まったという。発砲で、集まっていた約二万人の一部も将棋倒しになった。

（8.15 朝日新聞）

在パキスタン大使に久保田穰氏就任

8月1日付で、久保田穰（みのる）氏（60歳）がパキスタン大使に任命された。久保田氏は1959年外務省に入り、香港総領事、シリア大使などを経て、1995年4月から海外経済協力基金理事。

チベット八千米峰全山登頂チーム情報

先月号で報告した通り、パキスタンと合同したチベットチームは6月15日にナンガ・パルバット（8,126m）に登頂したが、登頂者は下記の六名である。

ツェリンドジ（39）、ベンバザシ（31）、アカプー

(34)、ジャブー (38)、ロツェ (34)、レンナ (31)。

小西隊ガッシャーブルム I 峰登頂

先月号で報告した J F M A ガッシャーブルム I 峰隊に別行動で参加していた小西浩文 (35)、北村俊之 (34) 両氏は、J F M A 隊と同日の 7 月 16 日、同峰に登頂した。二人は今春ダウラギリ I 峰に登頂しており、小西浩文氏は 7 座目の八千メートル峰登頂となった。

群馬岳連隊続報

先月号で報告した群馬岳連隊はその後、C 隊 (後藤文明隊長) の後藤隊長と尾形好雄隊員、シェールバ三人が 7 月 20 日、ブロードピーク (8,051m) に登頂した。ダブル・ハットトリックを目指していた群馬岳連隊であったが、ガッシャーブルム I 峰 (8,068m) を目指した B 隊 (佐藤光由隊長) が登山開始直後のブロードピークでの静岡隊の遭難救助活動や、降雪などにより雪崩の危険が高くなり登頂を断念した為、当初の目的は果たせなかったものの、名塚秀二氏の八千メートル峰登頂 7 座目、田島崇行氏の八千メートル峰日本人最年少登頂、吉田文江さんの八千メートル峰日本人女性同率最多登頂 (4 座目) など、幾つかの記録を塗り替えた。

神奈川ヒマラヤ登山隊 B C で大惨事

8 月 17 日にスキルブルム (7,360m) 峰の第二登に成功した神奈川ヒマラヤ登山隊 (広島三朗隊長以下 17 名) の一行は、8 月 20 日午前 1 時 15 分頃、懸垂氷河のセラック崩壊による雪崩の爆風に B C (5,300m) が襲われ、睡眠中のテントごと 4 ~ 40 m 吹き飛ばされた。これにより広島三朗 (54) 隊長と永澤茂 (47) 副隊長、中込清次郎 (50) 登攀リーダー、原田達也 (62)、土森譲 (50)、菊田佳子 (37) 三隊員の計六人が死亡、小田茂夫 (51)、松田謙介 (54)、鎌田実 (35)、初鹿裕康 (36) の四隊員が手足の骨折など重傷を負い、パキスタン人ポーター三人も負傷した。日本への第一報を入れた尾上弘司 (41) 隊員も負傷した。負傷者 4 人

はヘリコプターでスカルドの病院に収容され入院したが全員意識ははっきりしており、比較的元気だという。また、広島隊長らの遺体は、負傷を免れた隊員達により一端回収されたものの、現場付近は雪崩が再発する危険がある事や宗教的理由からポーター達の協力が得られず、遭難現場近くのクレヴァスに埋葬された。なお、B C マネージャーとして参加していた有本朋子 (61) 隊員は体調を崩し、一足先にスカルドに下山していて難を逃れた。

《中国》

H A J 女性隊ムスターグ・アタ登頂

ムスターグ・アタを目指していた H A J 女性隊 (市川春代隊長以下 6 名) は、8 月 16 日に市川春代 (47) 隊長と沢田幸子 (56)、狩野明美 (42)、竹内千恵 (31) 三隊員の計四名が登頂した。

一行はゲズ溪谷、スバシで高所順応訓練後、7 月 26 日 B C (4,350m)、29 日 C 1 (5,050m)、8 月 6 日 C 2 (6,000m)、10 日 C 3 (6,750m) とキャンプを展開し、8 月 16 日 9 時 50 分 C 3 を出発、15 時 40 分に登頂に成功した。

ニンチン・カンサ登頂

ニンチン・カンサ (7,206m) を目指していた H A J サマー・キャンプ隊 (天城敬彦隊長以下 13 名) は、8 月 17 日、志小田美弘 (38) 登攀隊長以下飛田和夫 (51)、森山安次 (47)、加藤和美 (44)、高橋敏雄 (38)、川崎浩史 (33) の五隊員の計六名が、翌 18 日には天城敬彦 (50) 隊長と野口道雄 (60)、石川龍彦 (45) の両隊員が登頂した。

一行は 7 月 20 日に成田を出発し、28 日 B C (4,850m)、31 日 C 1 (5,800m)、8 月 10 日 C 2 (6,400m) とキャンプを展開し、16 日に C 3 (6,500m) を設営しながら翌 17 日に頂上を目指したものの

トピックス

底辺層民衆の希望の星新大統領に就任

7 月 25 日にインドの新大統領に就任したコチェ

リル・ラーマン・ナラヤナン氏(76歳)は、インド南部のケララ州コタヤム地方の寒村に生まれた被差別カースト「不可触民」出身者である。祖父も父も、インド古代からの伝統医学アーユルヴェーダの医師であったが、所属階層のせいでさげすまれ、極貧だった。

男五人女二人きょうだいの四番目で、幼い頃から向学心に燃えていた。毎日16キロの道を歩いて通った小学校時代、わずかな学費が払えず教室を追い出されたが、教室の外に立って授業を懸命に聞いたという。

故ガンジー翁が、被差別民にも教育の機会を与えようと設立した「ハリジャン支援協会」の奨学資金で高校、大学に進んだ。成績は、いつもトップだった。

卒業後大学講師、タイムズ・オブ・インディアの新聞記者を経験後、奨学資金を得て英国へ留学。ロンドン大学経済政治学院で、有名な社会主義者ハロルド・ラスキ教授のもとで政治学を学び、同教授がネルー首相にあてた推薦状を持って帰国し、外務省に推薦されてアジア、欧州の大使館に勤務した。日本に在勤した事もある。

1949年に初めて赴任したビルマ(現ミャンマー)のラングーン(現ヤンゴン)在勤中、そこで開催されていたYMCA主催の人権シンポジウムで主催者の一人だったティン・ティンさんと知り合い、結婚した。それがウシャー夫人(76歳)である。夫人は結婚後、名前をヒンズー風に変えた。

退官後はネルー大学副学長、下院議員を勤め、1992年8月19日、インド副大統領に選出された。また、1995年12月には東京都広島で行われた国際会議出席の為来日した事もあり、親日家である。

(7.25朝日新聞、月刊インド8月号)

ブータン農業に生涯をささげた 西岡京治氏の後継者来日

ヒマラヤ山麓の王国ブータンで、西岡京治(けいじ)さんは農業指導に生涯をささげた。米や野菜、果樹など、日本の作物を次々に取り入れ、ブータン近代農業の基礎を築いたが、5年前に急逝した。その志を継いだ指導者、ジャンベイ・ドルジ

(47)さんが、苦難を共にした西岡さんの妻・里子(61)さん=西宮市在住=の招きで来日した。28年にわたって西岡さんが育てたブータン農業をさらに飛躍させ、アジアを代表する種苗会社をつくりたいという夢を抱いて。

里子さんは今春、一周忌から4年ぶりにブータンを訪ねた。西岡さんが始めたボンデ農場など国内8農場の種子部門を統括する種苗公社が1995年に設立され、ジャンベイさんが経営責任者として働いていた。

「西岡先生がつくった農場を政府から自立させ、独立採算を目指したい」とジャンベイさんは里子さんに話した。そのためには日本の種子をブータンで増やして輸出したい。日本の生産者など種子産業の調査やネットワーク作りが欠かせない事を里子さんが知り、「私にできることがあれば」と、私費でジャンベイさんを招いた。

ブータンで最も美しい谷といわれるパロ(標高2,300m)の町に、西岡さんは農場を開いた。

大学で遺伝育種学を学び、大阪府立高校で園芸を教えていた西岡さんは、海外技術協力事業団の農業専門家として1964年に夫婦で赴任した。近代国家作りが始まったばかりで、人口の九割を占める農業も自給自足を満たす程度だった。

稲の種類は $\frac{3}{4}$ が伝統の赤米で、白米は少数派、田植えは苗の間隔も数量もバラバラだった。最新技術・機械を導入する大型開発は持ち込まず、農民と語り合う農業を大切にした。

政府から与えられたわずかな土地を耕し、試験的に植えたハクサイ、アスパラガス、ブロッコリーなどブータンになかった野菜が実ると、飛ぶように売れた。

13年目から、南部山間地にある焼畑農業の村を水田の村に変えていった。学校や診療所もでき、人々が定住するようになった。里子さんとブータンで生まれた二人の子供を日本に帰して専念した事業で、昔からの暮らしにこだわる農民と八百回もの話を続けた。こうした功績に英国の「サー」にあたる称号「ダシヨ」が国王から贈られた。

2年の約束が国王の要請もあって延長を重ね、滞在は28年に及んだ。優秀な後継者も育ち、そろ

(8. 19 朝日新聞)

ヒマラヤから

ムスターグ・アタ便り

7月17日北京時間の18時30分にウルムチに着きました。北京～ウルムチ間の航空機には乗客の数が多く感じられ少々心配をしましたが、6人とも眠り込むほどの席がありました。ウルムチでは連絡官地里夏堤（ギリシャート22歳）、通訳牙生（ヤースン24歳）の若者の出迎えでした。隊員一同この若者に「エーッ！」（内心はうれしいようです）。

北京のムツとする暑さに比べると、32℃ほどの気温でも湿度がなく乾燥しており、空気が澄んでいるので気持ちが良いです。

夕食はビールでカンペ！日頃アルコールを口にしない隊員も喉をうるおしました。

18日夕刻（北京時間20時20分）、カシュガルに着きました。客什登山協会の出迎えを受け、早速客什新賓館へ。38℃の暑さには驚きましたが、大地の広がりを感じました。やはり大陸というか中央アジアを感じます。

19日にデボ品の整理、買物グループに分かれ作業を進めましたが、この炎天下の作業は少々こたえました。登山協会に連絡してありました日程変更、コック、ガソリン、ガスの関係も大丈夫でしたのでご安心下さい。

20日ゲズ溪谷泊、21日カラクリ湖泊、22日無事スバシに着きました。昨日23日4,250mまで順応し、今日は連日の移動の疲れもあり、休養としました。隊員一同まずまずの体調で予定通り27日BC入りします。間近に見るアタ峰はとても大きいです。今日は珍しく全容が見えます。他の隊の登頂成功のニュースを耳にしました。

充分事故のないよう気をつけて登山活動をしたと思っています。7月25日

H A J ムスターグ・アタ女性登山隊 市川春代

チャウチャウ・カンニルダ便り

この度は、私たちのヒマラヤ遠征登山に対し、

そろ帰国を、と考えていた1992年に腎不全のため59歳で他界した。葬儀は、王族や閣僚をはじめ約三千人が参列する「国葬」だった。

西岡さんと縁が深い農場で増えた種がいつか日本へ戻ってくる。高齢化の悩みが増す日本の生産者にとっても、低温で病害虫が少なく、労働力が安いブータンは魅力だ。7月中旬から末まで大阪や埼玉、岩手、北海道などを視察したジャンベいさんに、日本の種苗会社や栽培農家は好意的だった。関東の種苗会社とはタマネギやインゲンなどの種子取引の話が進んだ。

「西岡先生は今もブータン人の心に生きている。先生の思いは、もうけでなくブータン人がハッピーになることでした」とジャンベいさん。

里子さんは、夫が築き上げた遺産を遠くで見守りながら、「ジャンベいさんの会社が、ヒマラヤに種子会社ありと世界で通用するように大きく育てほしい」と願っている。（8.4朝日新聞）

ドライ・ラマの記録映画完成、TV放映へ

チベット仏教の指導者ドライ・ラマ十四世の生誕から1950年代末のインド亡命までを描くテレビ記録映画が中国で完成し、8月25日に中央電視台から放映される。活仏に選ばれた経緯や、中央政府と協力関係にあった時代が初公開の文献資料や証言で紹介される。18日付の人民日報海外版は「極めて資料性が高い」と伝えている。

中国側によると、ドライ・ラマ十四世は1935年に青海省湟中県の農家に生まれたとされる。十三世の死後の37年に転生霊童となり、厳密な宗教教育を受けた後、解放前のチベットの、政教合一の封建的農奴制度の指導者になった。

90分に編集された記録映画は、その過程を描くと同時に、51年の中国政府とのチベット平和解放協定締結や54年から56年までの北京訪問、全国人民代表大会での活動などを取り上げる。

人民日報によると、証言者は同郷の知人や親類、実家の元農奴、調理人、政府や宗教関係者、歴史学者など二十数人にのぼり、十四世が中央政府との緊密な協力関係を破り、「いかに祖国分裂の道を歩むに至ったか」を描くという。

ご支援をいただきましてありがとうございます。

私たちは、7月23日にニューデリーに到着し、インド側の窓口であるインド登山財団にて、登山条件などを確認し、装備・食料等の調達を行い、キャラバンに向けて移動準備中です。

隊員一同元気です。全員登頂に向けがんばりたいと思います。7月26日マナリ森田ホテルにて群馬高校教職員インドヒマラヤ登山隊 田中洋史

K 2 便り

アッサラーム アレイコム!!

7月20日の朝日新聞のコメント、ありがとうございました。こちらは、あらゆるトラブルがありましたが、7月の晴天に助けられ、7月19日、田辺治、鈴木幹夫、中川邦仁の3名が西稜から西壁を登ってK 2に登頂しました。21日の2次アタックは悪天のため中止しましたが、その後、28日、滝根正幹、中島明、山田良二、小林正巳の日本人4人と、ギャルブー、ミンマ、ベンバドルジェ、ダワタシのシェルパ4人が2次アタックに成功しました。これは、日本人はC 5からシェルパはC 4からアタックしたものです。

こうして、K 2新ルート（一部だけですが）の初登攀と、ネパール人のK 2初登頂をやりとげることができました。現地では、尾形さんはじめ群馬の人達にも大変お世話になりました。お礼申し上げます。7月28日K 2 B Cにて

J A C 東海支部K 2登山隊隊長 田辺治

スキルブルム峰便り

暑中お見舞い申し上げます。

7月25日、サボイア氷河の5,300mにベースキャンプを設営しました。明日より登山活動を開始致します。

スキルブルム峰(7,360m) ベースキャンプにて
神奈川ヒマラヤ登山隊1997

書 評

「福岡珠穆朗瑪峰登山隊」報告書

福岡市山岳協会が1996年春に、チョモランマ北

稜に派遣した登山隊の報告書。登山結果は、日本人最年少登頂、海外登山初見参での登頂と成果を上げたのであるが、それにも増して話題となったのは、インド隊からの「遭難者を見殺しにした」との云われ無きクレームであった。その経過や事後処理が詳しく報告されている。

一方、大量の物資を持ち込んだはずであるが、テイクイン、テイクアウトの報告が無いのは意外である。現在の登山は、登頂の成否が問われるのではなく、自らが「登山したい」と強く望んだその環境を、次の世代にも残すことにある。多くの関係者がその啓蒙に努力しているのであるから、人気のある山へ入山する大部隊の登山隊こそ、環境保全に対してどのような方針で望み、結果的に何が出来て何が出来なかったのかを報告し、次ぎへの参考として残す義務があると言えるだろう。

そのような努力の積み重ねがあってこそ、美しい自然を次の世代に残そうとする行為は啓発されていくのである。

A 4 ハードカバー 190ページ カラー24ページ
〒810 福岡市中央区天神1-4-1

ラリーグラス内 福岡市山岳協会

30周年資金協力者ご芳名

10口（星野光）、5口（滝口良二）4口（久保均）
3口（今村裕隆）2口（日向野恵美子）1口（林孝治、沼田敏彦、肉丸剛、石川昌、伊藤克美、林英子、小川貞夫、市川義輝、難波治雄、川上茂、山形正巳、嶋村芙美江、佐藤英樹、原人）

総計12名 2,727,000円（1997.7.25現在）

東京集会のお知らせ

日 時 9月29日（月）午後7時～
ムスターグ・アタ隊報告
場 所 H A J ルーム（地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分）
又は、J R 大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分）

チベット（西藏）自治区は、中国の南西部にあり、面積は約123万km²で（全国の12.8%）その中に約229万人（全国の0.19%）が住んでいる。

東は長江の上流部に当たる金沙江まで。西はインドやパキスタンとカラコルム山脈を境として国境を接し、南もインド、ブータン、ネパールなどとヒマラヤ山脈を挟んでの国境である。北は青海省、新疆ウイグル自治区となっている。

東の高原からは長江、メコン、サルウィンなどの大河が流れ出し、西の高原からもインダス、サトレジ、ヤル・ツァンポーなどが流れ出し大河の源となっている。

自治区内には、青藏高原をはじめとする多くの高原地帯が広がり、高度5,000m以上に点在する湖も最大面積のプマヨン・ツォを筆頭に50km²以上のものだけでも17つを数える。これらの湖沼から流れ出す水系は山野を駆け下り前述した大河へと注ぎ込むのである。

このような自然環境のため、山々の麓に近づくためには、ジープ、筏、ヤク、馬、ロバなど多種多様の手段に頼らなければならないのである。

チベットは、荒涼していると云う先入観をもっ

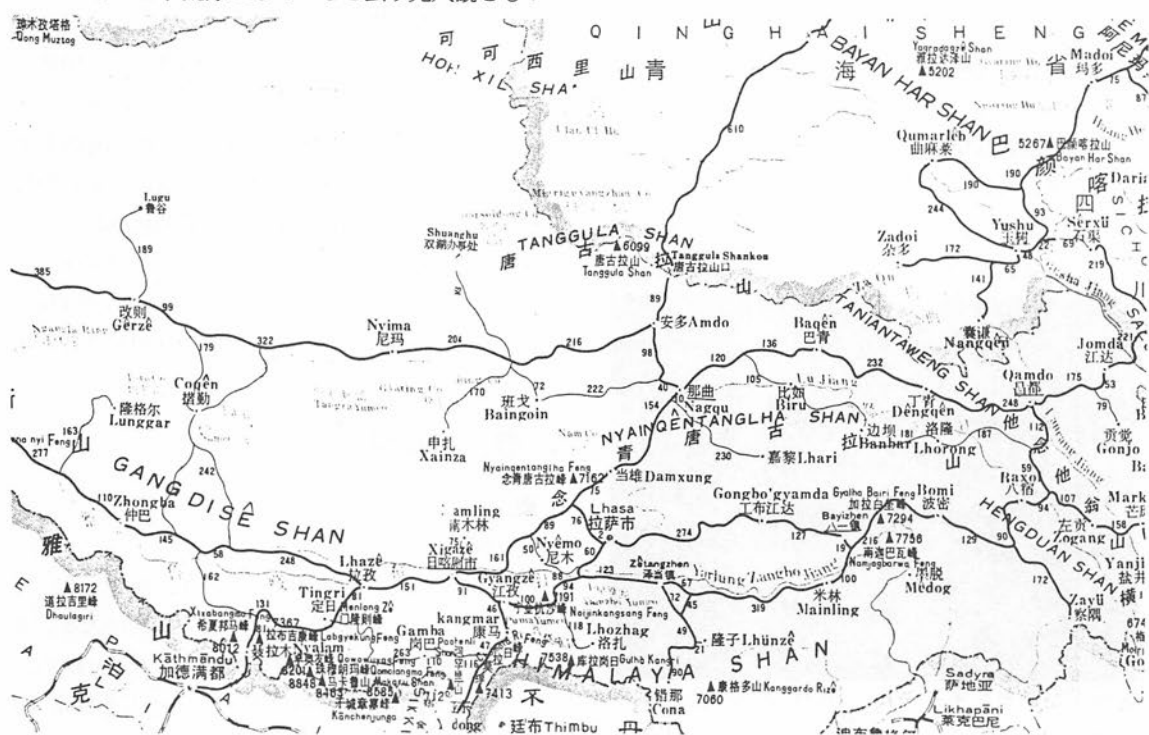
ている人が多いが、東のナムチャ・バルワ、ギャラ・ペリ周辺や南のジーロン地区などは、針葉樹林に覆われているのである。

広大なチベット自治区は、ラサ市、シガツェ市の他に71の県と一つの特別区に分けて、きめ細かく統治されている。未開放の地区の山々を登る場合は、これら地元の県レベルの意思が大きく左右するのである。

今、チベットの山々は、チョモランマ、チョー・オユー、シシャバンマの八千メートル峰に登山者が押しかけ、これらの山々は、オーバー・ユーズで悲鳴を上げている。一方では、クーラ・カンリ、ギャラ・ペリ、ナムナニなどの名峰では、登山者の姿を見るのは稀であり、静かな登山が出来るのである。

チベット自治区には、数多くの未踏峰が眠っている。山群の主峰が手つかずのまま登山者の訪れを待っている。今月号の表紙写真は、その代表的な山域である。

さあ！ あなたもじっくり研究して、地図とコンパスを片手にチベットへ出かけよう。



9-1 ギャラ・ペリ（加拉白里・Gyala Peri）

* 山脈：ニエンチェンタンラ山群の最高峰

* 位置：ラサ（3,658m）の東約375km。

[29° 19' N, 94° 59' E]

* アプローチ：ラサまでは北京～成都が飛行機で約2時間、成都～ラサが約1時間40分の旅。

ラサからは工布江達を経て、八一鎮まで1日。ここから林芝、米林等を経てペ（派）まで半日のジープの旅。ペからのキャラバンは右岸ルートは、キイカルまで車が使えらるが、ギャラまで馬。渡河後はポーターで合計5日間。左岸ルートは渡河して馬。その後ポーターとなり6日間でBCに到達するが、いずれも一度はヤル・ツェンポー江を舟で渡らなければ成らない。雨期のキャラバンでは鬱蒼とした原生林の中に張られたテント等の光景は探検時代を彷彿とさせる。ペからBCまで3,000mを越える峠はない。

* ルートの所要日数：86年HAJ隊は、西面から南南西稜に取りつき、三次のアタックを行い、40日間の苦闘の末、10月31日初登頂に成功した。

* 山の概念：主峰7,294m（以下全て中国登山指南による。）南南西のヤル・ツェンポー江に顕著な尾根が派生している。北西に双耳峰ともいふべき低いピークがある。北西約4kmには、6,812mのセンダン・プーがあるが、かつては6,309mの標高を与えられ

ていた。ここから北へ約2kmに6,592m峰がある。ギャラ・ペリの西約10kmには、ランメンバザラ6,846mがあるが、中国登山指南の写真でギャラ・ペリと紹介されている山がこの峰である。

* 通常の登山時期：秋

* 山名：ギャラは南西にある集落の名前。ペリはチベット語で「高い山」の意。

伝説によれば、ナムチャ・バルワとギャラ・ペリは、チベット仏教の三叉戟と太鼓を持つ四面の魔神デムチョク（ヒンドゥ教のシヴァ）の妻であるドルジェ・パンモ（ヒンドゥ教のデヴィ）の乳房であるという。現在でも地元では、右胸がナムチャ・バルワ、左胸がギャラ・ペリであるといひ伝えられている。

* 小史：植物調査や測量調査の関係者が東面から接近し、東面の写真が「World Atlas of Mountaineering」に載っているし、1985年の偵察の折に筆者も林芝で同じ角度で本人も入った写真を見た。この写真は1983年2月に撮ったものだといふ。

1985年9月HAJの山森欣一、三浦敏弘が初めて偵察のため西面に入山。ギャラ・ペリ氷河から南南西稜の4,200m地点まで偵察した。翌年飛田和夫隊長以下6名のHAJ隊が南南西稜から初登頂に成功した。

* 参考文献：神秘のグレート・ベンド ナムチャ・バルワ「1991年1月刊」 ヒマラヤ170号「1986年1月号」 ヒマラヤ183号「1987年2月号」

登山の概要

■主峰（7,294m）

1985年

9月～10月 西面偵察 HAJ隊

翌年の本番のために2名で偵察に入る。9月25日ギャラ・ペリ川河畔の2,850m地点にBC設営。9月30日ギャラ・ペリ氷河3,550



▲機上から見たナムチャ・バルワ(左)とギャラ・ペリ

m地点にBC設営。氷河と登路調査を実施した。

[隊長：山森欣一(41) 三浦敏弘(32)]

[東チベットの大湾区部と幻の高峰(山森欣一) 山と溪谷601号 1986年2月号]、[最高峰ナムチャ・バルワとヤル・ツェンポー 大屈曲点周辺の山々(山森欣一) 岳人464号 1986年2月号]

1986年

9月～11月 南南西稜 HAJ隊

9月15日ギャラ・ペリ氷河左岸の3,200m地点にBC設営。25日南南西稜の西面側取り付き地点である4,200mABC設営。西壁の右端の岩稜に取り付き、10月3日蟻の刃渡り状の雪稜5,000m地点にC1設営。11日には5,650m地点にC2設営。翌日5,800m地点で南南西稜に出る。南南西稜は幅の広い雪壁と

なっており、19日6,300m地点にC3設営。21日には、6,700m地点にC4を設営。一旦BCへ下山。29日第一次アタックを行うも風雪のため断念。30日第二次アタックも悪天のため敗退。31日第三次アタック隊として尾形、橋本、今村が6時15分にC3を出発し、8時半にC4に到達。15時頂上岩壁の基部に到着。頂上稜線まで3P。さらに雪壁を乗り越えて、16時55分初登頂に成功した。苦闘40日間、標高差4,000mの大登攀であった。

[隊長：飛田和夫(40) 尾形好雄(38) 太田健(32) 橋本康弘(32) 今村裕隆(27) 藤原拓夫(30)]

[謎の河の秘峰 ギャラ・ペリ(昭和62年9月刊)、謎の大河にそびえる幻の高峰「ギャラ・ペリ(日本ヒマラヤ協会隊) 山と溪谷618号 1987年2月号]

9-2 ナムチャ・バルワ(南迦巴瓦・Namcha Barwa)

* 山脈：東部ヒマラヤ山群の最高峰。

* 位置：ラサ(3,658m)の東約385km。

[29° 37' 51" N、95° 03' 31" E]

* アプローチ：ラサまでは北京～成都が飛行機で約2時間、成都～ラサが約1時間40分の旅。ラサからは工布江達を経て、八一鎮まで1日。ここから林芝、米林、ペ(派)を経てキイカル(3,200m)まで1日のジープの旅。キイカルからのキャラバンは、馬やポーターで約3時間ジェイチタンガ(接地当嘎)のBC(3,520m)に到達する。

ラサ～八一鎮間で5,000mのメ・ラを越えるが、他に高い峠はない。

* ルートの所要日数：92年日中合同隊は、西面からナイブンを越えて南稜に取り付き、登山期間43日間の苦闘の末、10月30日初登頂に成功した。

* 山の概念：主峰7,782m。西北西と東北東に長大な尾根が派生している。南に短く急峻な南稜が落ちてナイブ(7,043m)に続いており、初登頂もこのルートから行われた。西北西稜上には、4つの顕著なピークがあ

る。主峰に近いほうから7,344m峰、7,146m峰、ラジャン・プー(6,936m)、6,422m峰である。また、東北東稜には顕著なピークはないものの、北東の肩まで短く切れ落ちたあと、サンルン(7,095m)に続いている。サンルンは堂々とした山容の未踏峰である。

* 通常の登山時期：秋

* 山名：チベット語で「天から落ちてきた石ころの集まり」、「稲妻が天空に赤く燃えている」等の諸説がある。伝説によれば、ナムチャ・バルワとギャラ・ペリは、チベット仏教の三叉戟と太鼓を持つ四面の魔神デムチョク(ヒンドゥ教のシヴァ)の妻であるドルジェ・パンモ(ヒンドゥ教のデヴィ)の乳房であるという。現在でも地元では、右胸がナムチャ・バルワ、左胸がギャラ・ペリであると言い伝えられている。

* 小史：18世紀半ばから、19世紀初頭にかけて、パンディット等が調査のため入域した。また植物調査のため入域した人々によって、写真が撮られた。登山関係としては、1960

年12月チベット登山隊が、西北西稜5,000m地点まで到達。81年チベット登山協会が入山路を調査。82年中国偵察隊がナム・ラ等の登路を調査。83年には中国偵察隊がナイブン峰の初登頂に成功。翌年は本峰を目指したが、再びナイブン峰の登頂にとどまった。なお、H A Jでは、この84年登山隊を支援するため、83年秋に四川省で実施された同隊の合宿に2名を派遣して、岩登り技術を指導するとともに、高所用天幕、固定ロープ、スノーバー、E P Iコンロ&ボンベ等、登攀用具を贈った。90年秋には、日本山岳会と中国合同の偵察隊が西面に入り、主峰の西北西稜5,600m地点、ナイブン峰の6,900m地点まで達した。91年日中合同隊は、2回の限定開放という条件で同峰に挑戦、雪崩のため1名を失ったが登山を続行し、7,460mまで到達したものの登頂を断念した。同隊は92年再び挑戦し、ナイブン峰ルートから10月30日初登頂に成功した。

*参考文献：ヒマラヤの高峰3「1973年8月 白水社刊」 ヒマラヤ謎の河「1968年5月 あかね書房刊」 氷山雪嶺二千年「1985年3月ベースボール・マガジン社刊」 神秘のグレート・ベンド ナムチャ・バルワ「1991年1月 日本ヒマラヤ協会刊」

登山の概要

■主峰（7,782m）

1983年

3月～4月 ナイブン登頂 中国登山隊

翌年の本番のために16名で偵察に入る。3月4日西面3,520m地点にB C設営。4月18日までの間に合計6つのルートを偵察した。4月20日ナイブンの4,800m地点に設営されたC 2を出発したリンチン・ピンゾー、宋志義、シャオ・ジャブー、ワンドウ、ツェリン・ドルジ、タンツェン・ドジ、グイサンの7名は、6,000mにC 3を設営。翌21日18時25分ナイブン峰の初登頂に成功した。

[隊長：王振華(45) 成天亮(32) 桑珠(29) 仁青平措(39) 宋志義(32) 金俊喜(28)

陳建軍(28) 楊久輝(30) 張江援(30) 加吉(20) 齊米(25) 次仁 格桑(24)]

[氷山雪嶺二千年 1985年3月ベースボールマガジン社刊]

1984年

3月～4月 ナイブン登頂 中国登山隊

主峰の登頂を目指して3月14日3,520m地点にB C設営。17日4,300m地点にC 1設営。25日4,900m地点にC 2設営。30日5,600m地点にC 3設営。4月1日6,400m地点にC 4設営。10日7,000m地点にC 5設営。11日にはリンチン・ピンゾーとツェリン・ドルジの2名がナイブンを登頂。主峰に続く北側のルートを偵察したが、雪崩の恐れもあり断念した。

[隊長：王振華(46) 成天亮(33) 桑珠(30) 宋志義(33) 金俊喜(29) 陳建軍(29) 楊久輝(31) 張江援(31) 仁青平措(40) 次仁多吉(25) 加布(25) 格桑(25) 旺多(26) 丹增多吉(21) 村多(22) 齊米(26) 次仁 尼瑪次仁 (康金鳳 何小培 形麗 絹 登秋妹=以上女性) 黃振宇 楊勇 ト建平 楊樹淇 董建武]

[氷山雪嶺二千年 1985年3月ベースボール・マガジン社刊]

1990年

10月～12月 偵察 日中合同隊

日本側は日本山岳会。翌年の本番のため、合同で偵察のため入山。11月16日西面3,520m地点にB C設営。西北西稜を5,600mまで偵察したが断念・ナイブン・ルートに切り替えた。4,300m地点にC 1、4,580m地点にC 2、12月9日5,600m地点にC 3、6,350m地点にC 4を設営し、12月11日6,930m地点から主峰とのコルへの下降ルートを発見した。

[中国側隊長：桑珠(36) 陳建軍(35) 李致新(28) ジャブー(31) レンナ(23) ペンバ・ザシ(25) 日本側隊長：重廣恒夫(43) 早坂敬二郎(44) 大西宏(28) 佐藤正倫(27)]

[ナムチャバルワ峰偵察報告 山岳第八十六年 1991年12月日本山岳会刊]

1991年

9月～11月 南 稜 日中合同隊

初登頂を目指して9月28日西面3,520m地点にBC設営。ナイプン・ルートに取り付き、10月13日5,600m地点にC3を設営。16日C4ルート開拓に出発したが、6,250m付近で大西、木本隊員が雪崩に巻き込まれ、木本は脱出したものの大西は遺体となって発見された。29日から登山を再開。11月15日ナイプン峰先の6,900mにC5を設営。主峰とのコルに下降し、6,700mにC6を設営。20日7,350mまで到達したが悪天のため撤退。22日再度アタックに向かったが、7,460m付近で登頂を断念した。

[中国側隊長：桑珠(37) 陳建軍(36) ジャブー(32) ツェリン・ドルジ(32) ペンバ・ザシ(25) 羅新(27) ロツェ(29) ローサン・ダワ 王鳳桐 日本側隊長：重廣恒夫(43) 高見和成(45) 木本哲(35) 大西宏(29) 山本篤(28) 広瀬学(24) 小島彰 梶田正人 三輪文一 片岡泰彦 山田二郎 村木潤一郎]

1992年

9月～11月

前年の雪辱を期すべく入山し、9月14日西面にBC設営。23日5,600m地点にC3、10月11日ナイプンの肩6,900m地点にC5設営したが、悪天のためC2へ下山。26日C5を再建した。27日コルへ下降しC6設営。29日アタックを行ったが7,600m地点でビバークとなる。翌日再開し、12時9分ジャブー、ツェリン・ドルジ、ペンバ・ザシ、山本一夫、青田、山本篤が初登頂に成功した。また、この日C6を出発したサンジュ、ダー・チミ、ダチョン、三谷、佐藤も14時半登頂した。

[中国側隊長：桑珠(38) 加布(33) 次仁多吉(33) 辺巴扎西(27) 達穿(29) 大斉米(34) 洛桑達瓦 王鳳桐 張江援 李豪傑 王玉勤 日本側隊長：重廣恒夫(45) 山本一夫(46) 三谷統一郎(36) 青田浩(34) 山本篤(30) 佐藤正倫(29) 小島彰 梶田正人 飯田肇 中村進 山田二郎 斎藤惇生]

[日本・中国ナムチャバルワ合同登山 山岳 第八十八年 1993年12月日本山岳会刊]

東京新聞の本

山の情報誌 岳人



毎月15日発売(日・祝日の場合は前日) 定価670円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。

直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からとお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。

郵送料は通常号116円、特大号124円です。年間購読料は8,480円で送料は当社負担です。お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

97年	第1特集	特別企画
★1月号	日本の雪山大作戦	南米インカ・トレイルを行く
2月号	富士見十三州の山	春のフンザとバルト氷河
★3月号	山スキー大滑降	ネパールの夢のトレッキング
4月号	アルプスの雪稜	初夏のロッキーマウンテンコース
★5月号	花と森の山旅	中部の山岳会と奥美濃の山
★6月号	私の花の名山	創刊50年 世界のアルピニストたち
★7月号	今から間に合う海外の山	仙台のクラブ、東北の沢を行く
8月号	みちのくの山と沢	屋久島の緑深い峰々と人
9月号	修験の山は名山	山の達人と訪ねる秋の北海道
★10月号	紅葉の山、尾瀬と南会津	撮影クラブと秋の大峰山脈へ
11月号	晩秋、湯けむり紀行	フリークライミング天国・岡山
12月号	身を守る雪山技術	冬の奥秩父に生きる山人たち

(★は 特大号となります)

東京新聞出版局 (中日新聞 東京本社) 〒108 東京都港区港南2-3-13 ☎(03)3740-2674
書店で発売中。中日新聞販売店でも取りつぎます。

■ 寸 感 ■

ニンチン・カンサ隊に同行して、2ヶ月ぶりにラサに行った。梱包作業をしているところへ、クーラ・カンリのBCで会ったムサーにバツリと出会った。聞けばこれからザンムーに日本隊を迎えに行くと云う。山はシシャパンマで彼が、連絡官とのこと。え、この夏に日本からシシャパンマに…。聞いてないよ。ところで隊長は？「不知道」。何人？ 9人。

彼はシシャパンマと見栄を張ったのかも知れない。本当は周辺の6千メートル峰なのかも知れない。いずれにしても、今や、このような事(HAJ)の情報網にもかからない隊は、中国だけでなくヒマラヤ全域で起きている。一刻も早い、全国組織の情報管理機構の設置が望まれる。(山森)

事務局日誌(8月)

- 2日(土) ニンチン・カンサ隊員ラサで入院の連絡入る
4日(月) カバン峰資料12人に送付

- 9日(土) ヒマラヤ310号発送
17日(日) 山森専務理事カシュガルへ出発
21日(木) パキスタン独立50周年祝賀会(於、ニューオータニ、寺沢)
24日(日) ムスターグ・アタ女性登山隊帰国
25日(月) 東京集会(11名)
27日(水) ニンチン・カンサ隊、山森専務理事帰国
山岳史懇談会&E.ヒラリー氏サヨナラパーティ(八木原、寺沢)

ヒマラヤ No.311 (10月号)

平成9年9月10日印刷 9年10月1日発行
発行人 稲田 定重
編集人 山森 欣一
発行所 日本ヒマラヤ協会
〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501号
電話 03-3988-8474
郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテントラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遥かなる高みへ



個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク



キャラバンデスク

TEL03-3237-8384

～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のパイオニア



**株式
会社**

西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)1391(代表)

キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)8384(代表)

大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)

カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU, NEPAL ☎221707

運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店/〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店/〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店/〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館/〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店/〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店/〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店/〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店/〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店/〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブライカ店/〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブライカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店/〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店/〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店/〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店/〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店/〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店/〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店/〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メルオーダー)/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004